横芝の碑（その五）

笠ぬいて

（伊藤先生の頌徳碑と句碑）

北清水と栗山の境に鎮座在します清水神社は、産土神としても又史蹟としても名高く附近里人の尊崇を得ています。この社の鳥居の傍には、根深石と三波石が並んで建っています。これは旧上堺村出身の名士伊藤東一郎先生の句碑と頌徳碑です。

先生は明治二十二年北清水に生れ、医学を志して上京し二十五才にして医師となり、大正三年故郷清水で医院を開業されましたが、新知識による医術と貧富を厭わず特に貧者には医薬費を度外視する等の親切な診療は近隣の評判となり患者は常に門前に市をなす有様でした。そうした先生の高傑な人格は衆望を進め、山武郡医師会議長、上堺村長を始め幾多の要職に推され、又終戦後には栗山飛行場開拓の委員長として、開拓農民の指導に当る一方郷土の先覚者海保漁村の史蹟を県指定にするための努力、又上堺小学校々医としては当時蔓延を極めていたトラホームの撲滅を図る等実に八面六臂の働らきをされたのです。

こうした政治的手腕と科学的頭脳に勝れた先生は、又風雅の道にも深い造詣を持っておられました。中でも俳句を特に愛好されて、新派の俳人長谷川零余子の句誌「枯野」に親しみ、当時の文学青年斎藤重良の竹露氏や小学校長であった伊藤兵一郎の鉄弓氏と共に東雲吟社を創設し俳誌「しののめ」を刊行、自らも凡力と号して後輩の指導に当ったりされました。いろいろな事情で「しののめ」の刊行は中止されましたが東雲吟社の系統は存続し、先生も凡力の俳号を本名に因んだ東一路と改められて、医業を御子息の一路氏に譲られて悠々として俳句の奥義を味わっておられましたが、昭和三十四年三月遂に長逝されたのです。先生の霊前に香華を手向ける朝野の名士は枚挙に暇ありませんでした。その中で俳句の友人某氏は「余りにも多忙な公務と社会奉仕に尽瘁される中で科学者として、又政治家という影に隠れて俳人としての先生の姿はうすれていたが、やはり私達には立派な俳句の先輩であり友であった、これから俳人としての先生を後世に伝え、私達の、又後輩の灯台としたい、遠い地下から見守って欲しい」と後尾は絶句にむせびながら深々と頭を垂れて心ある同好の人々の袖をしぼらせたものです。

先生が逝いてから何回かの歳月はめぐりましたが、俳句を嗜む人々は、若葉に、蟬しぐれに、名月に、初氷にと、在りし日の俳人東一路先生の面影を忘れ得ませんでした。そして誰からともなく持ち上ったのが、告別式の霊前で某氏が誓った「俳人としての先生を後世に伝える」そのために句碑を建立、という話でした。ところが、この話が伝わると俳句仲間以外の元町村長さん其他の方々からも協賛の申込みが続き、句碑建立は何時か頌徳顕彰碑を併せて建立するということに変り、昭和四十三年四月、先生が好んで訪れたという清水神社の境内を場所として頌徳碑と句碑の除幕式が行なわれたということです。

写真の左に見える三波自然石が句碑で

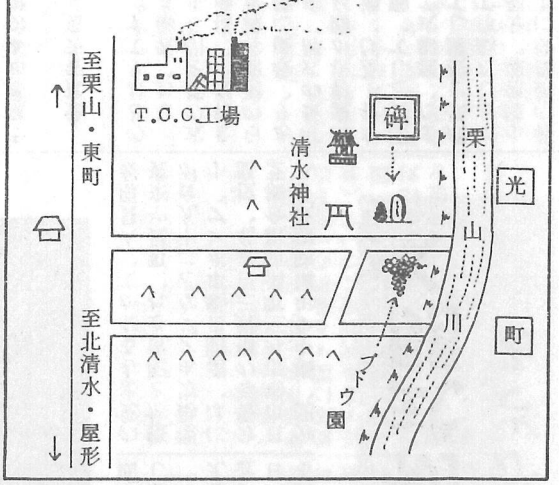
笠ぬいて　秋の深さを
知る日かな　東一路　と

刻まれています。

この句は、昭和十七年九月十日先生が上堺村長を退任された時の発句で、伊藤医院長（一路先生）はこの句について「父が村長退任後の心境は、責任を果し得て、自由になった一人の俳人としての感慨であったろうと思う、余りにも復雑で、そして又、いろいろな才能の要素を持った父としては、あらゆる身辺に惹起する問題が社会活動のきっかけとなって捨てておけず、多くの仕事を手がけ、それなりの功績を残したもの云々」と或書物で追想しておられますが、先生が各方面で活躍されその中に俳人としての名声も得ておられたことについて、海保漁村史蹟指定記念式の折「伊藤東一郎君の招待だから」と言って文学博士中山久四郎先生が来町された時「伊藤君俳句はどうだね」と話しかけておられたことが想い出されます。その時私は仕事の関係で伊藤先生に随従していたのです。（本稿取材に当り、北清水在住の斉藤重良（竹露）さんに御協力をいただきました。）

（給食センター小沢所長寄稿）

頌徳碑附近略図



国をささえる若い力
陸・海・空
自衛官募集
詳細は、役場総務課へ